ネワール族の祭り舞踊

ガン・ピャカン

一柳智子
片岡康子

〈研究目的〉

本研究は，カトマンズ盆地を中心に古い歴史を持つネワール族の祭り舞踊ガン・ピャカンの特性を明らかにし，文化的・宗教的側面から考察することを目的とする。

〈研的方法〉

① 文献研究[1]

② 現地調査：本研究の現地調査は，予備調査と本調査の2度に分けて行なった。

- 第1回現地調査（予備調査）
  期間；1981年8月14日～1981年10月16日
  場所；カトマンズ盆地
  内容；秋期におけるいろいろな舞踊の存在を，フィルム撮影（8ミリ，スチール），インタヴュー，[2]参与観察により確認した。文献収集も行なった。
- 第2回現地調査
  期間；1982年8月28日～1982年11月30日
  場所；カトマンズ盆地
  内容；予備調査において確認できた祭り舞踊のうち，最も観行化されていないガン・ピャカンに焦点を当て，フィルム撮影（VTR，スチール），インタヴュー，[3]参与観察を行なった。文献収集も行ない，ネパール語の習得にも力を注いだ。

〈研究結果及び考察〉

先行研究[4]において明らかになった種々の点のうち，仮説として導き出された「ヒンドゥー教のネワール（仏教）化」の点について継続研究した。

〈ヒンドゥー教のネワール（仏教）化 ― 文化習合の1段階的現象〉

写真1　バイラヴァの踊り

表1. ガン・ピャカンの演劇的構造

場	I		II							III			IV	V	VI	VII									VIII		IX
景	1	2	1	2	3	4	5	6	7	1		2	3	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1
時間（分）	10	18	21	11	8	11	9	10	9	36		18	12	4	5	2	13	3	2	2	2	10	1.5	7	10	4	15
人物＼小計	28		79							66				9		2	13					30					15
神 バイラヴァ																											
神 ガネーシャ																											
神 クマール																											
神 プラフ・ヤニー																											
神 ルドゥラヤニー																											
神 クマリ																											
神 ヴァイシュナヒー																											
神 ヴァーラーヒ																											
神 インドゥラヤニー																											
神 チャームンダー																											
神 マハラクシュミ																											
神 シンギニー																											
神 ビヤンギニー																											
神以外 パンドゥダッタ																											
神以外 ゲナダッタ																											
神以外 スチャリター																											
神以外 バタシンハ																											
神以外 ボー（兄）																											
神以外 ボー（弟）																											
										幕間劇				幕													

合の1例としてのガン・ピャカン〉

ネワール族の仏教形態は，日本の仏教と違い，在家仏教という特質を持つ。これは，つまり僧侶は寺院に所属するのではなく，日常的には在家の生活をしているということを意味している。[5] また，近隣の大国インドのヒンドゥー教の多大なる影響がみられるが，それでも本人たちは，「私たちは仏教徒である。」と言い張っている。その彼らがなぜヒンドゥー教の神々を讃える踊りを踊るのであろうか。

ネワール族は，カトマンズ盆地の先住民族であり，カトマンズ盆地を支配した種々の王朝以前より住みついている。（時には，ネワール族出身の王族もあった。）また，ネワール仏教は，原始仏教の姿を多く留めている例の1つと言われている。[6]

諸王朝は，自らの宗教であるヒンドゥー教をカトマンズ盆地に普及するための政策の一端として，仏教徒であったネワールの人々のうち特に僧侶階級の人々に，ヒンドゥー教の神々を讃える踊りを踊らせたのではないだろうか。そして，支配を受ける側のネワールの人々は，その改宗政策に屈しながらも，自身の信じるネワール仏教的側面をその踊りの中に組み入れてきた。

つまり，ガン・ピャカンは，ヒンドゥー教とネワール仏教の両者が，折衷し融合し合った文化習合の一段階的現象であると言えよう。このヒンドゥー教のネワール（仏教）化現象の具体例に，次の3点が考えられる。

1. アシュタマートゥリカとバイウヴァ

アシュタマートゥリカとは，ヒンドゥー教の母神崇拝の中で1つにグルーピングされている七母神サプタマートゥリカに，マハラクシュミが加えられたものである。[7] ラクシュミは，ヒンドゥー教の女

神であるが，それにマハが付けられて，ネワールの仏教徒たちにも信仰されている。ネワールの人々は，このマハを付加することによってネワール仏教的色彩をほのめかしていると言えよう。

また，ガン・ピャカンの中心的神であるバイラヴァは，シヴァの怒りの化身であるが，インド本国においては，さほど人気のある神ではないようである。"A dictionary of Hinduism"によれば，アウトカーストの人々によって崇拝されている神である。[8] しかし，ネパールにおいては――特に，カトマンズ盆地においては――バイラヴァは，かなり巾広く身近かな形で信仰されている。シヴァがシヴァとしてではなく，特にバイラヴァの形をとってカトマンズ盆地では信仰されていることも，ヒンドゥー教のネワール（仏教）化した現象の1つといえよう。

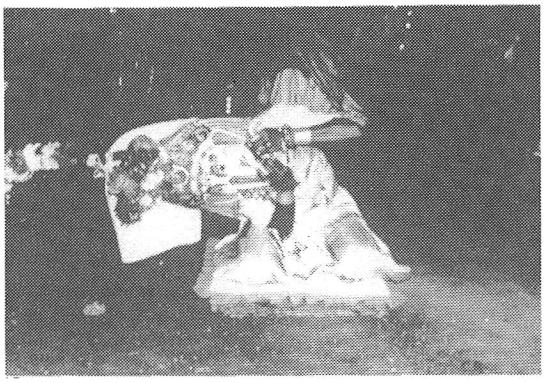

写真2　ガネーシャの踊り

2.　演劇的構造の中に組み込まれた幕間劇の内容

表1の様に，ガン・ピャカンの演劇的全体構造において，幕間劇以外の部分は，ヒンドゥー教の神々が踊る舞踊によって展開されている。また，幕間劇の部分は，人間が登場し，主に台詞と日常的動作によって展開されている。内容は，ネワール仏教的色彩（発表資料参照）が濃い。

幕間劇対幕間劇以外の部分を対照的に見ると，種々の要素が挙げられる。つまり，宗教的にみれば，ネワール仏教対ヒンドゥー教であり，登場人物別にみれば，人間対神であるし，また主な展開手段でみれば，台詞対舞踊であると概ね言うことができる。

幕間劇の内容で，ネワール仏教的な表現のほかに，ネワール仏教とヒンドゥー教とが完全に融合されてしまって，区別できなくなってしまった表現もある。

具体的には，次の様な点が挙げられる。

a. ネワール仏教的〔（　）内は，発表資料2の下線番号〕

ⅰ）カースト制に対する義務と疑問からの人間間の平等性。（全体）

ⅱ）バンドゥダッタと観音との関係。（2）

b. ヒンドゥー教とネワール仏教との融合

ⅲ）バンドゥダッタは観音信仰であるのに，アシュタマートゥリカの力を成就することを目的としている。（2）

ⅳ）マントウ，タントウ，禅定，ヨーガなどの用語。（1, 3, 4, 5）

3.　ガン・ピャカンの運営に対する一時的な消極的・拒否的態度

ガン・ピャカンの「グティ[9]」に，政府（つまり現王朝）からおりる援助金で踊りが運営されているが，例年，祭りが近くなると，関係者たちは「今年は踊りたくない。」という消極的態度を示す。しかし，援助金がおりると，儀軌にのっとって活動し始める。これは，関係者たちが，心の底からヒンドゥー教の神々を讃えて踊りに参加しているのではないという気持ちの表明であろう。B.C.17C以来，改宗はしないが，ヒンドゥー教の踊りを，消極的・拒否的な態度を示しながらも運営しているという事実は，文化習合の一例といえるのではないかと思う。

脚註

1.　重要参考文献

- Bajracharya, Pandit Vaidya Ashakaji, 1982, The dance of Astamatrika, Lalitpur.
- Bista, Dor Bahadur, 1980, People of Nepal, Kathmandu, Ratna Pustak Bhandar.
- 高岡秀暢編集，1983，百八観音木刻図像集解説書，東京，百八観音サンガ
- 中村元，1970，　原始仏教，東京，日本放送出版協会．他．

2. 3.　ガン・ピャカンについてのインタヴューのインフォーマントは，Pandit Vaidya Ashakaji Bajracharya氏。（ネワール仏教僧，ネワール仏教の権威者）。

4.　一柳智子，1984，「ネワール族の祭り舞踊 ―ガン・ピャカンを中心にして―」お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士論文．

5.　高岡秀暢氏（ネワール仏教研究者）のインタヴューより。（1982.10 第2回現地調査，カトマンズ市内において）．

6.　高岡秀暢氏のインタヴューより。（1984.8 高岡氏自宅にて）．

7.　Pandit Vaidya Ashakaji Bajracharya氏のインタヴュー（1982年　パタン市内）

8.　Margaret & James Stutley, P.41

9.　「グティ」とは，ネワール族の社会経済組織のことであり，儀軌の遂行，宴会の開催などを行なう。